

創造性教育論

深 草 正 博

はじめに

本学の教育学科では二年生で基礎ゼミと称して、全教員が一時間だけ自分の専門を語るという試みを行っている。具体的には、今年度の教員数は十八名で学生数は二四〇名であるので、単純に割ると一グループ十三人程度となる。この十三人のグループが十八人の教員を毎回めぐるのであるから、教員のほうは十八回同じことを繰り返すということになる。これだけで半年以上かかることになる。その後、さらに希望する教員二人の演習を三回ずつ受講することによって、一年が経過する仕組みになっている。ガイダンスが最初と途中に入るので全部でちょうど三十回となる。これは三年生からの入りたいゼミの選択のためにも都合のよいシステムと考えられ、教員からも学生からも評判がよい。私の場合、前半の十八回とも同じことを繰り返すことはなく、その時々でアレンジして学生と考えあうことにして

いる。本稿は、どのようにしたら自分が創造的になれるか、私の考え方の一端を基礎ゼミにおいて学生に示したものである。^①

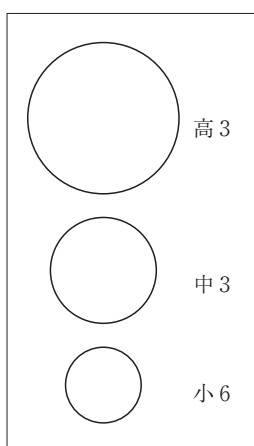
(1) これまでも創造性育成については、私の考え方のいくつかを示してきた。拙著『社会科教育の国際化課題』国書刊行会、一九九五年、第五章Ⅱ―二「学ぶこと、考えること」および同『環境世界史学序説』同刊行会、二〇〇一年、第一章「社会科教育の本質と創造性」を参照されたい。

一、これまでの学習の反省

第一図を見ていただきたいが、この小学校から高校までの丸は何を指すのであろうか、毎回聞くことにしている。ほとんどは私の意を汲んでか、知識の量と答えてくれる。それならば、この拡大する知識の量に対して、皆さんはこれまでどうしてきたのか、とさらに尋ねる。たいていは何を聞いているのかよくわからないというような反応を示す。

第一図

そこで、問い方を変えて、いったい皆さんが考えている勉強とは何なのか。もつといえは勉強とは脳がどのように働いていることをいうのか、と聞いてみる。多分に誘導尋問的になっているが、勉強とは知識の記憶だという答えがほとんどである。すなわち増え続ける知識の量に対して、記憶力をフル動員してひたすら覚える、これが勉強と考えているのであ



る。小学校から高校までの十二年間もつばらこうした方法で学んできたのである。

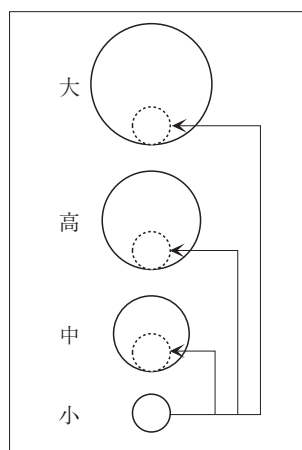
そうすると、この第二図からひとつの教育論が浮かび上がってくる。

簡単に言えば、小学生の丸は高校生の丸の中にスッポリと収まってしまふ。もしも教師の仕事が知識を伝達することにあるとすれば、高校生でも十分に小学生を教えることができるし、この図からすれば、中学生にもそれは可能だということになってしまう。もとよりこのように考えることは極端ではあるが、案外教師とは今見たように知識の伝達者と考えている場合が結構多いのではないだろうか。したがって、大学の教育学部に入って教師を目指す場合に学ぶことは、子どもたちよりもはるかに豊富な知識を持つ者が、その知識を彼らにいか速く確実に、分かり易く、面白く教えるか、ということとされているのではないだろうか。^①教授法にそうした技術的側面がまったくないとはいえないが、今考えるべきは、社会の変化がこの二十一世紀に入って、いよいよ激しさを増してきたということである。過去に記憶

をして学んだことが現在役に立っているのか、ということを実験に考えなければいけない時代に到達したといつてよい。^②

この変化のスピードの速さは文明の持つ宿命であり、かつてわが国最初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹は、これを物理学者らしく「とめどもないこの加速の文明」と名づけた。^③が、いっそう驚くのは福沢諭吉の文明論である。彼は早くも一四〇年前に文明の持つスピードの速さに気づいており、これを「日新」の一言で言い表しているのである。すなわち、「世の中の有様は次第に進み、昨日便利とせしものも今日は迂遠と為り、去年の新工夫も今年には陳腐に属

第二図



す」と。⁽⁴⁾現在こそがまさにそのような状況になっているのではないだろうか。昨日買ったパソコンはもう今日は、その機能や形態において古いのである。このような状況の中で従来のような記憶中心の学習ではなく、創造的なものを見方を養うにはどうすればよいのであろうか。次の節で検討したい。

(1) 古くは一七世紀のコメニウスにこうした考え方が表明されている。すなわち教授改革の目当ては「tuto 確実に、cito 速く、jucunde 面白く」と。梅根悟『教育著作選集 二』明治図書、一九七七年、四七頁。

(2) この点はすでに北尾倫彦も、自己教育力論との関連で指摘している。すなわち、科学技術が著しく進歩する時代が来ると、学校時代に学んだことがすぐに役立たなくなるのであって、大切なのは知識・技能そのものよりも、それらを獲得するのに必要な資質、学校を終えてから学び続けるのに必要な資質である、と。同『自己教育力を育てる先生』図書文化、一九八六年、二十一～二十二頁。

(3) 湯川秀樹『この地球に生まれ合わせて』講談社文庫、一九七五年、一五一頁。

(4) 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、一九四二年、九十七頁。ここでは現代仮名遣いに改めてある。

二、疑いから真理を見出す——二つの絶対からの自由——

この点でまずもって参考にしなければならないのは、やはりデカルトの「方法的懐疑」であろう。すなわち「いささかでも疑わしいところがあると思われそうなものはすべて絶対的に虚偽なものとしてこれを斥けてゆき、かくて結局において疑うべからざるものが私の確信のうちには残らぬであろうか」⁽¹⁾という問いである。創造性を導き出すため

には、私はこの問いを極めて重要視するものである。とりわけ先の図にも掲げたように、小・中・高と十二年間も教科書絶対・教師絶対の世界の中でひたすら疑うことなく暗記に没頭してきた学生にとって、創造性獲得のスタートになる問いだと考えている。そのためのひとつの方法として、高等学校日本史の教科書（山川出版）に載せられた図を比較させることにしている。

第三図は二〇〇一年発行の『詳説 日本史』から、第四図は同じく二〇〇三年発行のものである。驚くべきことに、たった三年の間に大きな変化が生じているのである。すなわち、前者に記載されていた、座散乱木・上高森・馬場壇A・三ヶ日人・牛川人・聖岳人の六つの遺跡が、後者では消え去っているのである^③。前者を一生懸命記憶した子どもたちにとっては、まことにむなしさだけが残るであろう。これは極端な例であるが、教科書の記述が決して正しいわけではないことの例証となり、教師や教科書を絶対視することへの戒めとなろう。常にこの二つの絶対から自由になっていることが創造性を養うためには大切なのである。重要なことは教科書に記載されていることは、あくまでもその時点で一応正しいと考えられていること、すなわち



第四図 2003年3月発行 山川出版
『詳説 日本史』



第三図 2001年3月発行 山川出版
『詳説 日本史』

地名・人名の □ は筆者が付したものの。

「仮説」であるにすぎないという認識である。

この点でも福沢は、本質をついた議論をしている。すなわち、それは「信の世界に偽詐多く、疑の世界に真理多し」という一文に集約され、西洋諸国の人民が今日の文明に達したその源を訪ねると、疑の一点より出たものばかりであると述べる。その具体例としてガリレオ、ニュートン、ワット、ルターらの業績を挙げている。そして、「世上に普通にして疑を容るる可らざる習慣に疑を容るる」ことのみが、西洋の諸大家が文明を導くものであると指摘する⁽⁴⁾。これは後に私が考えたことに大きなヒントを与えることになった。

(1) デカルト『方法序説』岩波文庫、一九五三年、四十四頁。

(2) マルクスも自分の子どものアンケート（「パパの好きなモットーは？」）に答えて、「すべてをうたがえ」と述べている。小牧治『マルクス』清水書院、一九六六年、十九頁。

(3) もとよりこの変化は、最初の三つについては、藤森新一の捏造によるものであり、考古学史上きわめて大きな汚点を残してしまった。これについては、河合信和『旧石器遺跡捏造』（文春新書、二〇〇三年）を参照されたい。なお後者の三つは、最近の研究で人骨であることが疑問視されるにいたったものである。同じ消されるにしてもその内実が違うことを子どもに知らせることは、子どもの興味を引き起こすかもしれない。

(4) 福沢、前掲書、一四九―一五一頁。傍点は引用者。たとえば『ガリレオ』が天体の旧説を疑いて地動を發明し、…『ニュートン』が林檎の落ちるを見て重力の理に疑を起こし、『ワット』が鉄瓶の湯気を弄んで蒸気の働に疑を生じたる如く…。

三、たとえ上手になること

ここでいう「たとえ」とは、少し気取った言い方をすればアナロジであるいは「類推」と言い換えてもよいものである。⁽¹⁾よく知られているものとして、原子物理学者ニールス・ボーアが、原子構造を太陽系の惑星の軌道に「おきかえた」と「たとえた」ことであろう。グラハム・ベルが耳の鼓膜の働きをモデルにして電話機を作ったのもこれに近い。

ここでは近年よく読まれている外山滋比古『思考の整理学』から、ひとつの優れたアナロジの例を取り出して論を進めてみよう。

氏は、飛行機とグライダーを引き合いに出して、これを今日の学校教育の「たとえ」とする。すなわち、この両者は遠くから見ると似ているが、ただ後者グライダーは自力で飛ぶことができない。ところが、学校はグライダー人間の訓練所だという。氏の言うところを聞いてみよう。

グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじってはいは迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったたりするのは規律違反。たちまちチエックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。⁽²⁾

飛行機とグライダーにたとえて、明治以来今日までの日本の教育のあり方の本質を、多少の皮肉交じりに巧みに説いていると思う。また氏は、長年のグライダー訓練ではかならず曳いてくれるものがあり、それになれると、自力飛

行の力を失ってしまうかもしれないと危惧する。さらに、学校はグライダー人間をつくるには適しているが、飛行機人間を育てる努力はほんのすこししかしていないともいう。それではこれからどうすべきか。結論部分を引用しよう。

指導者がいて、目標がはっきりしているところではグライダー能力が高く評価されるけれども、新しい文化の創造には飛行機能力が不可欠である。それを学校教育はむしろ抑圧してきた。：

他方、現代は情報の社会である。グライダー人間をすっかりやめてしまうわけにも行かない。それなら、グライダーにエンジンを搭載するにはどうしたらいいのか。学校も社会もそれを考える必要がある。⁽³⁾

外山の「たとえ」の巧みさを示しながら、実は、私の本稿での結論も示す形になった。本稿はまさしく、氏のいうエンジンの搭載の仕方を論じているということになるろう。

- (1) 湯川も自分が何か新しいことを考えつく、わからないことをわかろうとするときに「類推」が相当に役に立つと述べている。同『創造的人間』筑摩書房、一九六六年、一〇八頁。
- (2) 外山滋比古『思考の整理学』ちくま文庫、一九八六年、十一頁。
- (3) 同右、十五頁。

四、日常当たり前になっていることに「なぜ」のメスを入れる

実は、今回の基礎ゼミでは、以上の理論はほどほどにして、この項目の解説と実例の提示に力を入れている。というのも、このテーマこそ創造性を養うのに効果的であると、この頃強く感じているからである。しかも先に指摘したように、福沢がすでに「世上に普通に疑を容るる可からざる習慣に疑を容るる」と、西洋に文明を導いた本質を鋭く抉り出しているのである。^①さらにこのことと関連して、もうひとつ、ゴードンの「シネクティクス」(創造工学)にも啓発を受けている。彼の理論の根幹にある「異質馴化」と「馴質異化」が大きなヒントとなったのである。すなわち前者は「見慣れないものを見慣れたものにする」(making the familiar strange)であり、後者は「見慣れたものを見慣れないものにする」(making the strange familiar)である。人間という生物は根本的には保守的であり、見慣れない事物や観念にであうと恐れを感じる。そのため心は見慣れないものを前から知っている資料と照合して、見慣れないものを見慣れたものに変えてしまう。これが人間一般の性向であろう。もとよりこの方向も創造にかかわらないことはないが、やはり逆の、見慣れたものを見慣れないものにする方向のほうが、難しい分、創造に深くかかわるのでないかと思う。これが創造の基本的な訓練のひとつだとゴードンはいう。^②

ここではこうした考え方をもう少し平たく考えて、「日常当たり前になっていることに『なぜ』と問いかける方法」を提示したのである。^③したがって提示する側はここでは、「日常当たり前になっていること」の実例を見つけ、しかも「なぜ」と問う価値のあるものを探し出すことが非常に重要になってくる。実際に私が学生に示している例を掲げてみよう。もとより、一時間にすべて話しているものではなく、その時々に応じて選択的に提示しているものである。

① 私がフランス語を習い始めたときにびっくりしたものととして、数字七がある。フランス語では Sept であるが、そのとき英語の September が浮かんできて、「September はなぜ七月でなくて九月なのだろう」と思ったのである。フランス語の元になるのはラテン語なので辞書で見ると、七は Septem なのでよけいにその思いは強くなったのである。もちろん後で調べてみれば、やはりもともと September は七月であったものが、ローマ時代の暦の改革によって九月になってしまったのである。すなわち、ロムルスのもとを継いだローマ皇帝ヌマ・ポンピリウスは、そのロムルス暦を改めて第一表のようにしたのである。五月から十月までは数字どおりに並んでいる。しかし、十一月に割り当てられた Januarius の Janus はローマの門神であって、行動のはじめをつかさどる神でもあったため、この月こそ年初にもっともふさわしい神とされたのであろう。このため年末にあった十一月・十二月が年の初めに割り込んだため、第二表に見られるように、二ヶ月ずれていくことになったのである。⁽⁴⁾このような素朴な疑問から、暦についての探求がすすむであろう。

② 今度は曜日である。日曜日から土曜日までの英語の単語の中に、

《ヌマ暦の改革》

1月	Januarius	29日
2月	Februarius (メルケドニウス22日, 23日)	28日
3月	Martius	31日
4月	Aprilis	29日
5月	Maius	31日
6月	Junius	29日
7月	Quintilis	31日
8月	Sextilis	29日
9月	September	29日
10月	October	31日
11月	November	29日
12月	December	29日
1年		355日

第二表

〈出典〉 同右, 92頁

《ヌマ暦》
(太字はロムスル暦と異なった部分)

1月	Martius	31日
2月	Aprilis	29日
3月	Maius	31日
4月	Junius	29日
5月	Quintilis	31日
6月	Sextilis	29日
7月	September	29日
8月	October	31日
9月	November	29日
10月	December	29日
11月	Januarius	29日
12月	Februarius	28日
1年		355日

第一表

〈出典〉 永田久『暦と占いの科学』91頁

真ん中にsが入っているものが三つある。すなわち、Tuesday, Wednesday, Thursdayである。いったいこのsは何であろうか。そこに注目させれば、これはたとえはTom's bookのsで、属格「の」を表すものである。とすれば、このsの前にある、それぞれ、Tue, Wedne, Thurのdayということになる。それではこの三つは何であろうか。Wedneを例にとつてすこし考えてみれば、これは北欧神話の中でも最も勢力のあった男神Wodenで、ローマ神話ではユピテル（ジュピター）Jupiterにあたる。英語の中に北欧の神々がどのようにして入ってきたのかを追究していけば、ヴァイキングの歴史に突き当たることになる。^⑤

③ 学生に「アメリカ合衆国」と書かせる。ほぼ一〇〇パーセントこのように書く。それではと、その元となる英語を言わせると、United States of Americaと答える。そしてUnitedは統合するという意味であるから「合」にあたると説明すれば、これは学生はすぐに納得する。次にStatesはどうだと問うと、すぐに答えが来ない場合がある。国家という意味もあるが、ここではひとつの国の中で複数形になっているのでというような解説によつて、「州」と気づく。そうすると「合衆国」ではなく「合州国」でないかと問うと、一様に啞然とする。なぜ「合衆国」と書いてきたのかと尋ねると、ほとんどが学校でそう習ったからという。^⑥ 私はここで、本田一の著書の顔を見せることにしている。学生はかなり驚く。本田はどうして「合州国」としたのか。「あとがき」から引用したい。

合衆国でなく合州国とした理由。これはきわめて単純なことであつて、The United States of Americaを、まったくそのまま訳せばこうなるからです。改めて「合衆国」を考えてみますと、衆はpeopleに通じ、あたかもさまざまなる人民、さまざまな民族がひとつにとけあつた理想的社会であるかのような誤解をあたえ

ます。それが理想または将来の希望的現実であると好意的に解釈もできませんが、現在は弱肉強食が「自由」にできる典型的社会であって、強食側にはいいけれど、弱肉側には実に恐ろしいです。また州によっていかに法律や性格を異にするかは、一度でも合州国内を旅行した人は痛感したことでしょうから、「合州国」という名は正訳であるのみならず、その実情にもよく合っています。^⑦

一応納得できる解釈であるが、本田の引用文にもあるように、衆は people であり「合衆」とは「共和制」であって、明治の自由民権運動時代にアメリカに「レパブリック」の夢をのせたものでないかという点については忘れないでおきたいと思う。^⑧したがって私は現実のアメリカが必ずしも理想ということではないにしても、「合衆」に民主主義の夢を託すならば、使用してもよいのではないかと考えている。問題はここまで考えてきたのかどうかということである。

④ 正月になぜ「おめでとう」というのか、正月のきわめて寒い時期になぜ「新春」「頌春」「賀春」など「春」を使うのか、と問うと、今の学生はほとんど答えられない。実際のエピソードであるが、スーパールのレジ打ちをアルバイトでやっていた学生が、正月に子どもに「お兄ちゃん、こんなに寒いのにどうして春とかいてあるの」と聞かれてまったく答えられなかったと、やや恥ずかしげに話してくれたことがあった。時に、学生がそれは旧暦と関係あるのではないかということがある。それは問題解決の正しい方向を示しているが、突き詰るとほとんど

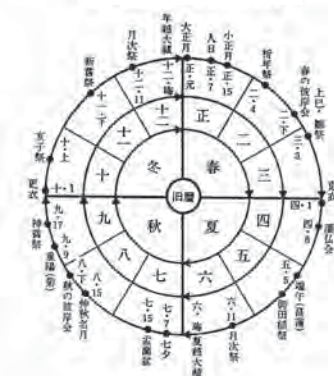


ど答えられないのである。だいたい「おめでとうとはどういう意味か」と聞くと、「おめでとうはおめでとうじゃないか」という顔をする。

実はここに中国の古代に生まれた「陰陽五行説」が深くかかわっているのである。まず第五図を見れば、旧暦の春は正月に始まっていることがわかる。そこで「木火土金水」の五行に五気を配置した第六図と重ねてみると、一月寅から始まる春は「木気」であり、まさに春は木が芽吹く時期である。「おめでとう」はしたがって「お芽出とう」であり、春になって木が芽吹いてきたことを祝った言葉であったのである。

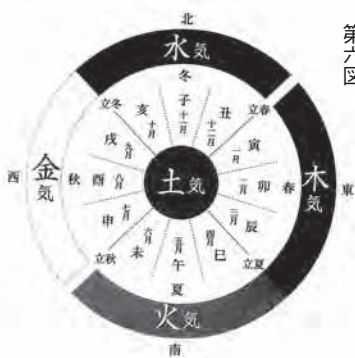
この第六図からは実に色々なことがわかってくる。たとえば「なぜ鬼退治は柿太郎でも梨太郎でもなく桃太郎なのだろう」。まず桃は「兆」を持つ木として、未来を予知し、魔を防ぐという信仰が生まれた。桃は中国では金果、つまり五気という金気で、五気の中で一番強い。そして桃太郎が鬼退治に出かけようとする、サルとキジとイヌがキビ団子欲しさにお供を申し出た。この「サル・キジ・イヌ」は図を見れば「申・酉・戌」であり、驚くべきことに金気のところに配列されているのである。しかも彼らが食べるキビ団子は色が黄色いで土気にあたる。五行における相生のルール「土生金」にあてはめ

第五図 旧暦の四季とおもな年中行事



〈出典〉所功『日本の祝祭日』PHP, 1986年, 37頁

第六図



〈出典〉吉野裕子『カミナリさまはなぜへそをねらうのか』69頁

ば、このキビ団子もまた「金」を生み、これを食した金気の動物たちは勇氣百倍となる。⁽⁹⁾この話をすると、学生たちはしばしば「鳥肌が立った」と言ってくれる。

以上具体例とその解説については四例にとどめるが、そのほかにも時に応じて提起する疑問を、列記しておきたい。

- ・県名と県庁所在地名が同じ場合と異なる場合があるがそれはなぜか。(明治政府の差別?)
- ・「甲子園」の名の由来は。「土用」は。(→これは、上記④との関連で話す)
- ・アルファベットのうちなぜAが最初にきているのか。(Aは牛の頭を逆さにした絵文字からきており、牛は遊牧民にとっても大切な資本(Capital)であった)
- ・アルファベットという言い方は最初の二文字A・Bのギリシャ語の発音(アルファ・ベータ)からきているが、なぜ最初の二文字だけでアルファベットが代表されているのか。言い方を換えれば、A・Bがなぜそれほど重要なのか。(Bは家の構えを表す。つまりA∥資本とB∥家が最も重要であった。ただし、これでこの疑問の十分な答えになっているかはお未知のところが多い)
- ・英語の数字では十二までが一単語で、十三からは三プラス十となっているのはなぜか。(わからない部分が多い。イギリスでは貨幣制度がずっと十二進法であったこととの関連?もともと根本にはオリンポス十二神、イスラエル十二部族、イエスの弟子十二人などがかわっているか?あるいはキリスト教徒にとって三位一体の三と四福音書の四をかけた十二は関連があるのであるか。ちなみにスペイン語では十五まで、フランス語では十六までが一単語。その他一ダース∥十二や黄道十二宮などもこの関連で興味をひく。)

最後に注意しておきたいことは、疑問への解答を見つけ出すことが第一義的ではないということである。そうではなくて、あくまでも今まで当たり前前すぎて何も感じなかったことに対して、「なぜ」と問うその習慣をつけること、このことを主張したのである。

- (1) この点については、私が日ごろの大学での実践から感じていたことを、福沢の該当箇所を読んで、一四〇年前に彼がすでに発見していたのか、と驚いたのが真相である。
- (2) W・J・J・ゴードン『シネクティクス―創造工学への道―』ラティス刊、一九六四年、第二章、参照。
- (3) ゴードンはこのための実践的方法として①擬人的類比②直接的類比③象徴的類比④空想的類比を掲げており(同右、三十五頁以下)、これらは三で述べた「類推」とも深くかわる。が、ここではこれ以上立ち入る余裕がないので、前掲拙著『環境世界史学序説』第一章や、高辻正基『記号とはなにか』ブルーバックス、一九八五年、一五〇頁以下の優れた解説を参照されたい。
- (4) 以上の点について詳しくは、永田久『暦と占いの科学』新潮選書、一九八二年、八十八頁以下を参照。なお十月Octoberについて、学生にタコは英語で何というかと聞けば、ほとんどOctopusと答えるので、pusはギリシア語の「足」を意味し、Octoは八だから「八足」ということで、タコとなり、Octoberも本来「八月」であると説明すると、学生はここでも二カ月ズレていることに驚く。
- (5) 太田垣正義『英語の語源』創元社、一九七八年、二五頁以下および荒正人『ヴァイキング』中公新書、一九六八年、一四三頁以下参照。
- (6) このことは、教育学的には興味深い問題を提起しているように思われる。最初のところでも述べたように、

教科書絶対・教師絶対としてひたすら暗記してきた、日本の教育のひとつの弊害が出ているように思われる。本当に納得して自己のものとしていないのである。教える側も反省せねばならないところであろう。

- (7) 本田勝一『アメリカ合州国』朝日文庫、一九八一年、二八七頁。また、橋爪大三郎『アメリカの行動原理』(PHP新書、二〇〇五年)では、特に説明もなく「合州国」が使われている(州の重要性については説明がある、六十三頁以下)。

- (8) 穂積重行『歴史の盲点』時事通信社、一九九一年、二五四～二五八頁。ただし、本書では、「合衆」とは「ユーナイテッド・ステイツ」でなく、昔「レパブリック」をそう訳したのだという故人の雑談が手がかりになっている。その発言の出所が明らかでないことを断っている。

- (9) 吉野裕子『カミナリさまはなぜヘソをねらうのか』サンマーク出版、二〇〇〇年、五十九～六十二頁。その他やや解釈は違うが、永田久『年中行事を「科学」する』日本経済新聞社、一九八九年、七十八～八十、一一五～一一八頁、参照。

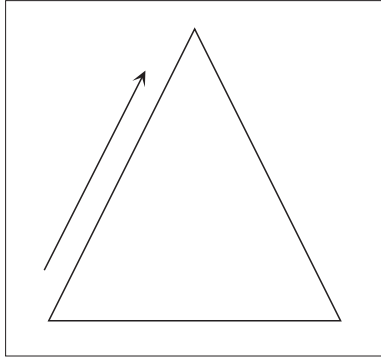
- (10) もう少し厳密に言えば、ギリシア語の最初の二文字アルファとベータからできたラテン語アルファベトゥム alphabetum に由来する。シャルル・イグーネ『文字』文庫クセジュ、一九五六年、四十六頁。

- (11) 古代イスラエルに関して、その部族同盟が六ないし十二の構成員からなっていたのは、一年に一ヶ月ないし二ヶ月ずつ交代で中央聖所の管理や守備にあたっていたためであるという見解がある(ただしこれもひとつの仮説)。高橋正男『旧約聖書の世界』時事通信社、一九九〇年、一六四～一六六頁。

おわりに

最初にも述べたように、わずか一時間の内容であるから、語ることは限られている。その中でのおよその展開を本稿では述べてみた。学生がこれ聞いてどのような感想を持ってくれたかは、まだアンケートを取ったことがないので分からない。今後の課題である。講義の最後に学生にいつも言うのは、できるだけ高い目標をしっかりと持つことが、創造性を養うのには非常に重要であることを、第七図のようなピラミッドで示している。頂点を目標として、今の自分の位置をしっかりと定めた上で、矢印のようにすすむ。この矢印を漢字一字で示すと何になるのか、私としては「夢」

第七図



と答えさせたかったのであるが、ある学生は「志」といつてくれた。もちろんこれも立派な解答である。しかも自分の中に領域の異なっていくつかのピラミッドを持つことを学生に勧めている。複数のピラミッドを持ち、常にそれぞれの領域で「夢」「志」を抱いて努力していく。これが自らの中に創造性を身につけさせる大事な要素ではないかと思う。

最後にかつて出会ったすばらしい本を紹介しておきたい。それは子どもたちの素朴な疑問に、ノーベル賞受賞者が答えたものだ。その「はじめに」において、ジャーナリストのアクセル・ハッケは、子どもは何かのついでに大人に大問題を突きつけてくるが、大人はそれについてほとんど答えることができない。しかしそれに答えることができなくても（あるいは答えることができないからこそ）、

その後変化が起こると述べている。さらに続けて、人生は質問に満ちており、また、人間は質問するから人間なのであり、それに答えようとするから人間なのである、ともいう¹⁾。そして本書には子どもからの二十の質問が載せられている。参考までに列記すると以下のごとくである。「どうしてプリンは柔らかいのに、石は硬いの?」「政治って何?」「科学者って何をする人なの?」「どうして貧しい人とお金持ちの人がいるの?」「どうしてフライドポテトばかり食べちゃいけないの?」「空はどうして青いの?」「愛情って何?」「電話ってどうしてつながるの?」「もうすぐぼくと同じ人ができるようになるってホント?」「戦争はどうして起こるの?」「どうしてママとパパは働かなくちゃいけないの?」「お芝居を最初に作った人はだれなの?」「空気が何?」「人はどうして病気になるの?」「葉っぱはどうして緑色なの?」「どうしたらノーベル賞をもらえるの?」「忘れちゃうことと忘れないことがあるのはどうして?」「どうして男の子と女の子がいるの?」「地球はいつまで回っているの?」「一たす一はどうして二なの?」。このような子どもの素朴な質問から、私たちが日常の中で習慣づけたい態度を学ぶことができるのではないだろうか。

(1) ベッティーナ・シュティーカー『ノーベル賞受賞者にさく子どものなぜ?なに?』主婦の友社、二〇〇三年、一〇〇〜一六頁。